

## 「気になる」子どもの保育における 保育者の感情的実践に関する研究

－ 保育者の熟達化とクラス規模および「気になる」子ども在籍数の視点から －

### A Study on Preschool Teacher Emotional Practice of Caring for “Children of Concern”

- From the Perspective of Preschool Teacher Proficiency and Class size ,  
Number of Children of Concern -

中山 智哉

Tomoya NAKAYAMA

#### 要約：

本研究は、「気になる」子どもの保育における保育者の感情的実践に着目し、①保育者の熟達化（保育経験年数）、②クラス規模とクラスにおける「気になる」子どもの在籍数の2つの視点から、その実態を明らかにすることを目的とした。調査は、A県およびB県の保育者319名を対象に質問紙法で実施した。その結果、「気になる」子どもの保育における感情的実践について、まず保育者の熟達化との関連では、保育者の経験年数が長いほど、「気になる」子どもに対応する際の感情コントロールおよび共感的な対応が増えること、また子どもに対する厳しさや怒りの感情が低減することが理解された。特に、経験年数が5年未満と5年以上で差がみられた。次に、クラス規模と「気になる」子どもの人数については、クラス規模が大きくなるほど、またクラスにおける「気になる」子どもの人数が多くなるほど、保育者にネガティブな感情が表出しやすくなる可能性があり、保育者のメンタルヘルスを含めた保育の質に影響する可能性が示唆された。

キーワード：「気になる」子ども／保育者／感情体験

Keywords：“Children of Concern”／Preschool Teacher／Emotional Practice

## 1. 問題と目的

### (1) 問題

近年、保育の分野において情緒面や行動面に発達の課題をもつ子どもへの特別支援の重要性が認識されている。2018年に改訂された「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」、それぞれにおいて、障害のある子どもの保育に関して、指導計画の中に位置づけながら子どもの状態に合わせ柔軟な保育を行うことや、個別の計画の作成、保護者や他機関との連携の必要性が示され、特別な支援を要する子どもに対する保育は、今後ますますその必要性和専門性が求められている。また、保育現場では、障害の診断がある子どもだけでなく、いわゆる「気になる」子どもの保育の課題が指摘されている。「気になる」子どもとは、「発達障害と共通した特徴が認められるが、はっきりとした診断がついておらず、保育者がその子どもに対してどのように関わってよいか戸惑う子ども（藤井ら、2010）」などの状態像を示す子どもとされる。

現在、こうした「気になる」子どもに対する保育上の難しさが多く調査で報告されている。例えば、尾崎ら（2009）は「気になる」子どもの保育において「発達に応じた適切な指導」「保育への迷い」「他児保育との兼ね合い」など、通常の保育活動において多くの保育者が困難感を抱えていることを明らかにしている。また、こうした困難さは、保育者のメンタルヘルスに大きく影響を与えていることがわかっている。神長ら（2010）は、「気になる」子どもを担任する保育者は、その対応やクラスのまとまりのなさを自らの保育実践力の低さとして捉え、自信喪失となるケースがあることを指摘している。また、吉兼ら（2010）の調査では、「気になる」子どもを受けもつ保育者は、対応の困難さからバーンアウト指数（燃え尽き症候群指数）が高いことが示されている。さらに、こうした負担感は、子どもに対するネガティブな感情体験につながることもある。例えば、酒井ら（2014）が小学校教諭を対象に行った調査では、教師が発達障害をもつ児童とのかかわりにおいて、不安や困惑だけでなく、ときに怒りや嫌悪の感情を抱いてしまうことを明らかにしている。同研究は、保育者を対象に調査したものではないが、「気になる」子どもの保育においても同様に、保育者が困難感や負担感だけではなく、子どもに対してイライラしてしまう、思わず感情的な対応を取りそうになってしまうなど、保育において様々な感情を伴いながら実践に臨んでいることが推察される。

こうした「気になる」子どもへの保育における保育者の感情体験は、感情労働の観点から捉えることができる。感情労働とは人々と対面して、あるいは声を介して

働く仕事で、職業上適切な感情や不適切な感情というものがきめられており、適切な感情状態を保つための“感情ワーク”が重要な職務内容の一部になっているものと定義される（Hochschild,1983）。また感情労働における「自分が本来感じていること」を抑制し、職業上「感じるべきこと」へと感情コントロールすることは、それが長期にわたり継続する場合、過度な心理的負担をもたらす可能性があることが指摘されている。現在、「気になる」子どもの保育においても、上述の報告にあるように、保育者は様々な困難や感情を伴いながら実践していることが推測され、まさに感情労働としての側面が窺える。

一方、こうした保育者の感情体験が保育に与える影響はあるのであろうか。松永ら（2012）は「気になる」子どもへの保育上の対応において、保育者が思わず発するネガティブな言葉がけが、当該児に対する他児のネガティブな印象や言動を引き出すことを指摘した。また松永（2013）は、こうした保育者の対応が子どもに与える影響について、多くの保育者がその影響の強さを自覚していることも明らかにしている。現在「気になる」子どもへの支援は、二次障害を予防する観点の重要性が指摘されている（榊原、2012）。二次障害とは、乳幼児期から続く周囲の不適切な関わりや否定的な評価が、子どもの自尊感情を低下させ、本来の障害特性を超えた情緒的・行動的問題を引き起こすものであり、小学校中学年以降に顕在化しやすく、青年期以降に持ち越されることも多いとされる（田中、2008）。こうした二次障害の予防という観点からは、家庭はもちろん乳幼児の時期にかかわる保育者が、当該の子どもの特徴について理解を深め、決して感情的、否定的に対応するのではなく、その子どもに応じた適切で受容的なかわりをもつことが必要といえる。また、保育者のそうした対応は周囲の子どもたちにも影響を与え、よりよい保育（支援）環境の形成につながると考えることができる。

これを踏まえると、「気になる」子どもの保育における保育者の抱く感情に焦点を当てることは、保育・支援実践の質の観点からも、保育者のメンタルヘルスの観点からも、有意義であることが理解される。これまで保育における感情労働に関する研究は、保育者の専門性としての“感情的実践”という観点から、その動向がまとめられている（中坪、2011）。しかし、現在までに「気になる」子どもの保育における保育者の感情的実践に着目した研究は見当たらない。

## （2）目的

以上の議論から、本研究は「気になる」子どもの保育の中で生じる保育者の感情

の実践に着目し、「感情労働」の観点から、その実態を明らかにすることを目的とする。具体的には「気になる」子どもの保育における保育者の感情面について、次の2つの視点から検討することにした。

第1点目は、保育士の熟達化の視点である。高濱（2000）は、保育者は経験年数を重ね、熟達するにつれて豊富な構造化された知識をもつようになり、保育上の問題解決のために、文脈と結びついた手がかりやコツを上手く使用することで課題を解決していくことを報告している。こうした保育者の熟達化による知識や保育技術の向上は、「気になる」子どもの保育における保育者のゆとりや余裕といった感情面に影響することが推測されるため、本研究の視点に組み入れた。

第2点目は、クラス規模や「気になる」子どものクラスの在籍数の視点である。クラス規模や保育者と子どもの人数比率は、子どもの健やかな発達や保育者の負担感などと密接に関連しており、保育の質を高める要因としてこれまでも議論の対象とされてきた（稲毛、2013）。また、「気になる」子どもの保育における保育者の負担感を指摘する報告は多い（神長ら、2010、尾崎ら、2009）。これらを踏まえ、本研究では、クラス規模やクラスにおける「気になる」子どもの在籍数が、保育者の感情面に与える影響について、その関連性を検討することにした。

## 2. 方法

### （1）調査対象の選定

本研究の調査対象は、3歳児～5歳児クラスを担当する保育者とした。その理由として、保育者が「気になる」子どもの特徴の中で、より保育上の対応の難しさ感じるのは、他児との関係や集団的活動など社会性の側面に関することが多いためである（下野未ら、2007）。幼児期の育ちとして、3歳児以降、次第に仲間関係やクラス集団が活性化し、仲間同士の相互的なやり取りを通じて社会的な発達が促されていく。しかし同時に、この時期は仲間関係や集団活動に関するトラブルも多くなる。岡村（2011）は「気になる」子どもの特徴的な姿として、3歳児では視線のあいにくさ、見通しがもてない等、4歳児は友達とのトラブル、思いを言葉で伝えられず、手が出てしまう等、5歳児では3・4歳児の特徴に加え、ルールが守れない、衝動的、暴力、暴言等で、気持ちの切り替えにくさ、他児とのトラブル等を挙げている。このように3歳児～5歳児のクラス担任は、子どもの対人的なトラブルなど「気になる」子どもに対する保育上の困難およびそれに伴う感情体験が生じる可能性が高いことから、本研究の調査対象として選定した。

## (2) 調査方法

A 県および B 県の 2 つの地域の 3 歳児～5 歳児クラスを担当している保育者を対象として質問紙調査を実施した。A 県では幼稚園教諭、保育教諭を対象とした教師研修会に参加した保育者および調査協力を得られた 20 園（幼稚園 15 園、保育園 3 園、認定こども園 2 園）の保育者、B 県では保育キャリアアップ研修、免許更新講習に参加した保育者を対象に回答を依頼した。質問紙は合計 500 部配布し、そのうち 395 名から回答を得た（回収率：79%）。その中で、現在 3 歳児～5 歳児クラスを担当し、かつ回答に不備のなかった保育者 319 名を分析対象とした。調査時期は 2018 年 2 月～2019 年 8 月であった。なお、分析には統計処理ソフト SPSS ver25 を使用した。

## (3) 調査内容

- ①感情労働尺度：荻野ら（2004）が看護・介護職を対象に作成した感情労働尺度を参考に、「気になる」子どもを保育する保育者用に文言を修正し、13 項目を作成した。また、教示文として、「現在クラスにいる特別の配慮を必要としている子どもを 1 人思い浮かべてください。その子どもとかかわる際に、他の子どもに比べ、各項目の感情の程度を教えてください」と示し、「いつも感じる」～「全く感じない」の 5 段階評定で求めた。
- ②フェイスシートにおいて、性別、年齢、保育経験年数、配属クラス、クラスの規模（人数）、クラスの「気になる」子どもの人数を尋ねた。なお、本研究において「気になる」子どもは、障害の診断をされていないが、発達障害と類似した特性を持ち、保育者にとって保育が難しいと考えられている子どもとした（質問紙内に「気になる」子どもの定義を示した）。

## (4) 倫理的配慮

依頼時に、口頭および文書において、調査目的、質問内容、調査の実施について研究協力者（実施園、当該連盟・協会）へ説明を行った。また調査時に、調査への参加は自由意志（途中で辞退することも可能で、不利益もないことも伝える）、匿名であること、回答は統計処理により、個々の回答者の回答内容が、そのまま公表されることがないこと、回答を持って同意とみなすことを質問紙内に明記するとともに口頭で説明を加えた。

### 3. 結果

#### (1) 対象者の属性

対象となった 319 名の保育者の属性は以下の通りである（表 1）。性別は男性（1.6%）、女性（98.4%）であった。年齢は、20 歳代（50.8%）が最も多く、30 歳代（23.8%）、40 歳代（16.0%）、50 歳代（9.0%）であった。職場は幼稚園（74.9%）、保育所（33.2%）、認定こども園（6.9%）であった。保育経験年数は 5 年未満（35.4%）、5 年以上 10 年未満（29.5%）、10 年以上（35.1%）であった。

表1 対象の属性 （保育者：319名）

属性	項目	N	%
性別	男性	5	1.6
	女性	314	98.4
年齢	20歳代	162	50.8
	30歳代	76	23.8
	40歳代	51	16.0
	50歳以上	30	9.4
職場	幼稚園	239	74.9
	保育所	106	33.2
	こども園	22	6.9
保育経験	5年未満	113	35.4
	5年～9年	94	29.5
	10年以上	112	35.1
担任クラス	3歳児	113	35.4
	4歳児	105	32.9
	5歳児	101	31.7

#### (2) クラス規模と気になる子どもの在籍数

まずクラス規模については、庄司ら（2011）は、3 歳児以降のクラスの適正規模は、4、5 歳児クラスで 20 ～ 25 人程度、3 歳児クラスでは 10 ～ 20 人としている。そこで本研究では庄司ら（2011）の知見を参考に、クラス規模を「19 人以下」「20 人～ 25 人」「26 人以上」の 3 つのグループに分類した。

次に保育の場における「気になる」子どもの在籍割合は、園全体の 10% 程度との報告がある（櫻井、2015、丸山、2008）。本研究におけるクラス規模の平均は 21.5 人であった。そこで、その約 10% である 2 人を基準に、本研究では「気になる」子どものクラス在籍数を「2 人以下」「3 人以上」のグループに分類した。以下にクラス規模と「気になる」子どもの在籍数のクロス表を示す（表 2）。

表2 クラス規模と「気になる」子どもの在籍数のクロス表

			気になる子どもの数		合計
			2人以下	3人以上	
クラス規模	19人以下	N	38	50	88
		%	43.2%	56.8%	100.0%
	20人～25人	N	50	112	162
		%	30.9%	69.1%	100.0%
	26人以上	N	16	53	69
		%	23.2%	76.8%	100.0%
合計		N	104	215	319
		%	32.6%	67.4%	100.0%

### (3) 感情労働尺度の基礎統計量

感情労働尺度 13 項目の平均値および標準偏差の基礎統計量を算出した。その結果、すべての項目において天井効果およびフロア効果がないことが確認された(表 3)。

「気になる」子どもへの保育における感情労働尺度の平均得点をみると、「子どもの気持ちに共感しようとより意識している (M=4.22、SD=0.60)」「子どもの気持ちを汲み取るために、より配慮することがある (M=4.07、SD=0.67)」「子どもの気持ちの変化に敏感に気づくよう特に意識している (M=4.05、SD=0.72) と子どもへの共感的な感情を示す 3 項目が平均得点 4 点を超える高い値を示した。

また、「子どもに怒りの感情を示さなくてはならないことがある (M=3.28、

表3 感情労働尺度 基礎統計量

	M	SD
子どもの気持ちに共感しようと、より意識している	4.22	0.60
子どもの気持ちを汲み取るために、より配慮することがある	4.07	0.67
子どもの気持ちの変化に敏感に気づくよう特に意識している	4.05	0.72
自分が子どもに表している感情に、特に注意を向けることがある	3.81	0.79
子どもの気分を高めるように努めなくてはならないことがある	3.65	0.86
仕事があっても、子どもの気持ちが収まるまで話を聞くことがある	3.58	0.73
状況に応じて感情を使い分けなくてはならないことがある	3.43	0.85
自分の感情を抑えることがある	3.29	0.85
子どもに怒りの感情を示さなくてはならないことがある	3.28	0.82
子どもにとりわけ優しく接しなくてはならないことがある	3.27	0.82
子どもに厳しい態度で接しなくてはいけないことがある	3.22	0.68
自分で感じた気持ちをそのまま、子どもに表すことがある	2.75	0.75
子どもが話し続けても、さえぎって自分の指示を伝えることがある	2.67	0.79

SD=0.82)」「子どもに厳しい態度で接しなくてはいけないことがある (M=3.20、SD=0.68)」といった子どもに対するネガティブな感情や「状況に応じて感情を使い分けなくてはならないことがある (M=3.43、SD=0.85)」といった感情コントロールに関する項目が3点を超えており、一定数の保育者が「気になる」子どもに対してこうしたネガティブな感情体験していることが理解できる。

#### (4) 感情労働尺度の因子分析

感情労働 13 項目の因子構造の検討を行うため、最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、3 項目が因子負荷量 .40 に満たなかったため削除し、再度 10 項目で因子分析した結果、3 因子が抽出された。第 1 因子は、“子どもの気持ちの変化に敏感に気づくよう特に意識している”、“子どもの気持ちに共感しようと、より意識している”、“子どもの気持ちを汲み取るために、より配慮することがある”、など、共感的な内容から構成されるため「ポジティブな感情表出」と命名した。第 2 因子は、“子どもに怒りの感情を示さなくてはならないこと

表4 「気になる」子どもへの感情労働尺度 (最尤法, プロマックス回転後)

	F1	F2	F3
<第1因子 ポジティブな感情表出> ( $\alpha=.76$ )			
子どもの気持ちに共感しようと、より意識している	.78	-.04	.01
子どもの気持ちを汲み取るために、より配慮することがある	.76	.01	-.03
子どもの気持ちの変化に敏感に気づくよう特に意識している	.57	.02	.03
自分が子どもに表している感情に、特に注意を向けることがある	.44	-.01	.06
<第2因子 ネガティブな感情表出> ( $\alpha=.72$ )			
子どもに厳しい態度で接しなくてはいけないことがある	-.07	.80	.11
子どもに怒りの感情を示さなくてはならないことがある	.08	.76	-.11
子どもが話し続けても、さえぎって自分の指示を伝えることがある	-.02	.41	-.03
<第3因子 感情統制> ( $\alpha=.76$ )			
状況に応じて感情を使い分けなくてはならないことがある	-.09	.01	.84
子どもにとりわけ優しく接しなくてはならないことがある	-.04	-.06	.65
自分の感情を抑えることがある	.06	-.03	.59
因子間相関			
F1			
F2	.04		
F3	.30**	.07	

\*\*= $p<.01$

がある”、“子どもに厳しい態度で接しなくてはいけないことがある”など、ネガティブな感情体験を示す内容から「ネガティブな感情表出」と命名した。第3因子は、“状況に応じて感情を使い分けなくてはならないことがある”、“自分の感情を抑えることがある”など、保育者が感情をコントロールするといった内容から「感情統制」と命名した。3因子構造の内的整合性を検討するため、各下位因子についてCronbachの $\alpha$ 係数を算出した。その結果、「ポジティブな感情表出( $\alpha = .76$ )」、「ネガティブな感情表出( $\alpha = .72$ )」、「感情統制( $\alpha = .76$ )」、と概ね良好な数値であったため、内的整合性は十分であると判断した。なお、「感情統制」因子と「ポジティブな感情表出」因子の間には有意な正の相関がみられた(表4)。

#### (5) 感情労働因子の平均値の比較

まず、保育経験年数が、「気になる」子どもの保育における保育者の感情に及ぼす影響を調べるため、保育経験「5年未満」「5年以上10年未満」「10年以上20年未満」の3群を独立変数、感情労働3因子を従属変数とする分散分析を行った。その結果、感情労働3因子すべてにおいて主効果が確認された。そこで下位検定(Tukey法)を実施した結果、まず「ポジティブな感情表出」は、保育経験「5年以上10年未満」および「10年以上」は「5年未満」より平均値が有意に高かった。次に「ネガティブな感情表出」は、保育経験「5年未満」は「5年以上10年未満」および「10年以上」より平均値が有意に高かった。最後に「感情統制」は、保育経験「10年以上」は、「5年未満」より平均値が有意に高かった(表5)。

次に、クラス規模と「気になる」子どものクラス在籍数が「気になる」子どもの保育における保育者の感情に及ぼす影響を調べるため、クラス規模「19人以下」「20

表5 保育経験年数による感情労働3因子の平均値の比較

因子	経験年数	N	M	SD	F	p値	多重比較
ポジティブな感情表出	5年未満	113	15.58	1.84	3.91	.021*	5年未満<5~10年未満
	5~10年未満	94	16.42	2.34			5年未満<10年以上
	10年以上	112	16.48	1.96			
ネガティブな感情表出	5年未満	113	9.37	1.65	3.91	.021*	5~10年未満<5年未満
	5~10年未満	94	9.31	1.97			10年以上<5年未満
	10年以上	112	8.79	1.55			
感情統制	5年未満	113	9.58	2.15	6.81	.001**	5年未満<10年以上
	5~10年未満	94	10.13	1.95			
	10年以上	112	10.31	1.88			

\*\*= $p<.01$  \*= $p<.05$

人～25人」「26人以上」の3群および「気になる」子どもの在籍数「2人以内」「3人以上」の2群を独立変数、感情労働3因子を従属変数とする2要因の分散分析を行った。その結果「ネガティブな感情表出」において、クラス規模 ( $F(1,313)=6.96, p<.001$ ) および「気になる」子どもの在籍数 ( $F(1,313)=5.82, p<.001$ ) の主効果が認められたが、交互作用は有意でなかった。下位検定 (Tukey法) を実施した結果、クラス規模については、「19人以下」に比べ「26人以上」で有意に平均値が高かった。また「気になる」子どものクラス在籍数については、「2人以下」に比べ「3人以上」で有意に平均値が高かった。一方、「ポジティブな感情表出」および「感情統制」については、クラス規模、「気になる」子どもの在籍数、交互作用、すべてにおいて有意差は認められなかった (表6)。

表6 クラス規模および「気になる」子どもの在籍数と感情労働3因子の分散分析

気になる 子どもの 在籍数	クラスに2人以下						クラスに3人以上						クラスの 規模 主効果	気になる 子どもの 在籍数 主効果	交互作用			
	19人以下		20人～25人		26人以上		19人以下		20人～25人		26人以上							
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	F	P	F	P	F	P
ポジティブな感情表出	16.16	0.33	16.16	0.29	15.62	0.52	16.16	0.29	16.08	0.19	16.37	0.28	0.68	n.s.	0.09	n.s.	0.73	n.s.
ネガティブな感情表出	9.05	1.13	8.51	1.47	9.31	1.46	9.38	1.47	9.11	1.67	10.05	1.54	6.96	**	5.82	**	0.31	n.s.
感情統制	9.58	0.32	9.88	0.27	9.43	0.51	10.08	0.28	10.28	0.19	9.88	0.27	2.87	n.s.	0.93	n.s.	0.01	n.s.

\*\*= $p<.01$  \*= $p<.05$

#### 4. 考察

感情労働尺度を因子分析した結果、子どもに対する共感的な内容を示す「ポジティブな感情表出」、子どもに対する怒りの感情などを示す「ネガティブな感情表出」、保育者が感情をコントロールするといった内容を示す「感情統制」の3つの因子から構成された。また「感情統制」因子と「ポジティブな感情表出」因子の間に有意な正の相関がみられた。

まず保育経験年数が、「気になる」子どもの保育における保育者の感情に及ぼす影響を調べるため、保育経験「5年未満」「5年以上10年未満」「10年以上20年未満」において感情労働因子3因子の平均値に差があるかを検討した。その結果、「ポジティブな感情表出」は、保育経験年数が長いほど、「気になる」子どもへの保育の中でより用いられることが理解された。一方で「ネガティブな感情表出」は逆に

保育経験年数が浅いほど、「気になる」子どもの保育の中で体験することが多いことが理解された。この2因子に関しては、保育経験年数が5年未満の保育者と5年以上の保育経験がある保育者の差がみられた。加藤ら（2013）は、保育経験5年未満の新任保育者と、5年以上の中堅・ベテラン保育者における職務上の困難感について検討している。その中で、新任保育者は、中堅・ベテラン保育者に比べて「クラス経営が難しい」「子どもへの一斉指導が難しい」「自分の力不足を感じる」など、保育技術の未熟さや専門的な知識の不足からくる困難感を強く感じていることを明らかにしている。また、障害児保育に関しても、廣澤（2018）は、保育経験が少ない（5年未満）保育者は、経験の豊富な保育者に比べ障害児保育における困難感が高いことを明らかにしている。これらの見解を踏まえると、保育者の経験が増し、より多くの専門知識や保育技術が身につくことで、「気になる」子どもの保育に対する困難感が低減され、そのことが保育者の精神的なゆとりを生み、子どもの気持ちへの共感や焦点化を促進させることにつながるのかもしれない。また逆に、経験の浅い保育者は、「気になる」子どもへの保育により難しさを感じるため、上手くいかないことへの焦りやイライラが生じ、それが「ネガティブな感情表出」につながるのではないかと推察される。次に「感情統制」は、保育経験10年以上の保育者が、5年未満の保育者に比べ「気になる」子どもの保育において多く用いていることが明らかとなった。これまで感情労働の研究では、本来感じている感情を職業上求められる感情へ転換する、いわゆる感情ワークを長期にわたり継続する場合、精神的な負担につながるなど、ネガティブな側面から扱われることが多かった。しかし、感情ワークは、自律的・戦略的に用いることで対象と関係性を構築するために有効な手段としての側面もあるとの報告がある（木村、2010）。確かに、保育場面で様々な子どもの反応や感情に接しても、保育者が自身の感情を上手にコントロールし、適切に対応することで、子どもとの良好な関係形成や円滑な支援に結びつくことが推測される。本研究において10年以上の保育経験をもつ保育者が、5年未満の経験しかない保育者に比べ、保育場面において感情統制を多く用いているという結果は、こうした側面を反映したものといえるのかもしれない。またこのことは、本研究において「感情統制」因子と「ポジティブな感情表出」因子の間に正の相関がみられたことから推測される。

次に、クラス規模と「気になる」子どものクラス在籍数が「気になる」子どもの保育における保育者の感情に及ぼす影響を調べるため、クラス規模「19人以下」「20人～25人」「26人以上」の3群および「気になる」子どもの在籍数「2人以内」「3

人以上」の2群を独立変数、感情労働因子3因子を従属変数とする2要因の分散分析を行った。その結果、「ネガティブな感情表出」は、クラス規模が大きくなる(25名を超える)ほど、また「気になる」子どもの人数が増える(3人以上)ほど、保育者が多く体験する感情であることが理解された。1961年の国際公教育会議では、教師1人あたりの幼児の標準的人数は25人以下が望ましい旨の勧告がなされている。また、新井(2007)によると、保育者が提案する保育可能な1クラスの幼児の人数は、保育所では、3歳児が18.1人、4歳児が22.1人、5歳児が21.1人であり、幼稚園では、3歳児が18.8人、4歳児が22.4人、5歳児が25.4人と、各クラス25名以内と捉えていたことを報告している。本研究の結果では、クラス規模が「19人以下」のクラスに比べ「26人以上」のクラスが保育者の「ネガティブな感情表出」の平均値が高かった。つまり「気になる」子どもの保育において、クラスの規模が大きくなると(25人を超えると)、保育者が子どもに対して厳しさや怒りなどネガティブな感情を表出せざる得ない状況が生じやすいという可能性が指摘できる。次に、「気になる」子どもの在籍数については、「2人以下」に比べ「3人以上」が保育者の「ネガティブな感情表出」が高かった。この結果から、クラス規模とともに、クラスに在籍する「気になる」子どもの人数も保育者のネガティブな感情を表出させる要因になることが理解された。木曾(2013)は、診断を受けていない発達障害傾向児(気になる子ども)の数の多さが、保育士のバーンアウトの高さと関係していたことを報告している。またこれまで多くの研究で、感情労働とバーンアウトの関連を指摘している(荻野ら、2004)。これらを踏まえると、クラスにおける「気になる」子どもの人数の多さから生じる保育課題は、子どもに対するネガティブな感情表出の増加という保育の質の問題とともに、保育者のメンタルヘルスとの関連も含めて検討する必要のある課題といえる。

## 5. まとめと課題

本研究は、「気になる」子どもの保育における保育者の感情的実践に着目し、①保育者の熟達化(保育経験年数)、②クラス規模とクラスにおける「気になる」子どもの在籍数の2つの視点から検討してきた。まず、保育者の熟達化に関しては、経験年数が長いほど、「気になる」子どもに対応する際の感情コントロールおよび共感的な対応が増えること、また子どもに対する厳しさや怒りの感情が低くなることが理解された。特に、経験年数が5年未満と5年以上で差がみられた。次に、クラス規模と「気になる」子どもの在籍数については、クラスの規模が大きくなるほ

ど、また「気になる」子どもの人数が多くなるほど、保育者にネガティブな感情が表出しやすくさせる可能性があり、保育者のメンタルヘルスを含めた保育の質への影響が懸念された。

本研究で示された結果は、保育の質を高める上でクラス編成や保育者配置など保育運営上の参考資料になるとともに、「気になる」子どもの保育における保育者支援の必要性を示す重要な知見といえる。特に、5年未満の若手保育者や、25名を超えるクラス、「気になる」子どもが3人以上いるクラスを担当する保育者は、「気になる」子どもに対してネガティブな感情を表出しやすい状況にあること、また、こうした状況は保育者のメンタルヘルスにも影響を及ぼす可能性があることが示されている。今後は組織（園）として実態を把握し、保育者一人に負担を背負わせないよう職員間で共通理解を深め、人的支援や外部機関との連携を含めた園全体の支援体制を構築することが求められる。中山（2009）は、保育の中で生じるネガティブな感情体験は決してマイナスの意味だけでなく、そうした感情を受け止めるサポート環境があることで、保育者自身が感情を意味づけ、自身や対象の理解を深め、保育者として成長していくことを報告している。保育者が保育の中で生じる様々な感情を、職場内の共有の課題として捉え、組織として対処していくことは、保育の質を高める上でも、保育者を支える上でも重要といえるだろう。

最後の本研究の限界を2点あげる。1点目は、「気になる」子どもの認識である。本研究ではクラスにおける「気になる」子どもの人数（有無）について、保育者の主観に委ねている。水内（2001）は、保育者の子どもを捉える枠組みや働きかけの変化によって「気になる」子どもが気にならない存在に変わっていく事例を報告している。つまり、個々の保育者によって「気になる」子どもと認識するかどうかは異なるため、単純に子どもの人数だけで本課題を捉えることができない側面がある。今後、客観的な指標を用いるなど「気になる」子どもの認識を共通化する工夫が必要といえる。2点目は、本研究で取り上げた①保育者の熟達化（保育経験年数）、②クラス規模とクラスにおける「気になる」子どもの在籍数という2つの視点以外の要因である。「気になる」子どもの保育では、「気になる」子どもの状態像、保護者との関係、職場の環境、保育者を取り巻くサポート体制など、様々な要因によって、保育者の感情体験や困難感に違いがあることが推測される。今後は本研究の結果とその他の多様な要因との関連を含め詳細に検討していくことが必要といえるだろう。

## 引用文献

- ・新井美保子（2007）『幼稚園・保育所における乳幼児の適正人数に関する研究：愛知県内の保育者を対象とした意識調査から』愛知教育大学研究報告，教育科学編，33-36.
- ・藤井千愛・小林真・張間誠紗（2010）『保育園における“気になる子ども「特別なニーズを有する子ども」”への特別支援保育』富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要教育実践研究 5, 131-139.
- ・廣澤満之（2018）『障害児保育における保育者の熟達化－保育困難感と熟達へのニーズの分析を通して－』白梅学園大学・短期大学紀要 54, 37-54.
- ・Hochschild,A.R.（1983）『The Managed Heart University of California Press』石川准・室伏亜希訳『管理される心』世界思想社.
- ・稲毛文恵（2013）『保育の質から見た保育所の現状と課題』立法と調査 No.315, 161-170.
- ・神長美津子（2010）『支援のための取り組み（1）幼稚園・保育所における取り組み』無藤隆・神長美津子・河村久・柘植雅義,「気になる子」の保育と就学支援, 東洋館出版, 14-17.
- ・加藤由美・安藤美華代（2013）『新任保育者の抱える職務上の困難感の要因に関する研究－新任保育者と中堅・ベテラン保育者および園長との比較－』岡山大学大学院教育学研究科研究集録(154), 15-23
- ・木村優（2010）『協働学習授業における高校教師の感情経験と認知・行動・動機づけとの関連－グラウンデッド・セオリー・アプローチによる現象モデルの生成－』教育心理学研究 58(4), 464-478.
- ・木曾陽子（2013）『発達障害の傾向がある子どもと保育士のバーンアウトの関係：－質問紙調査より－』保育学研究 51(2), 199-210.
- ・丸山美和子（監修）大阪保育研究所（編）（2008）『保育現場に生かす「気になる子ども」の保育・保護者支援』かもがわ出版, 46-73.
- ・松永あけみ・大久保沙織（2012）『幼児の他児認知に及ぼす保育者の言葉がけの影響(1)』群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編 61, 189-199.
- ・松永あけみ（2013）『「気になる」子どもへの保育者の対応と周囲の子どもたちへの影響に関する保育者の意識調査』群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編 62, 139-145.
- ・水内豊和（2001）『「ちょっと気になる子ども」の事例にみる保育者の変容過程』保育学研究 39, 28-35.
- ・中坪史典（2011）『保育者の専門性としての感情的実践に関する研究動向』広島大学大学院教育学研究科紀要, 第3部(60), 241-248.
- ・中山智哉（2009）『感情理解から生まれる保育者同士の育ち合い・支え合い』発達 No118, ミネルヴァ書房, 37-43.
- ・岡村裕子（2011）『保育者からみた「気になる子ども」についての調査研究』滋賀大学大学院教育学研究科論文集 14, 37-48.
- ・荻野佳代子・瀧ヶ崎隆司・稲木康一郎（2004）『対人援助職における感情労働がバーンアウトおよびストレスに与える影響』心理学研究 75(4), 371-377.
- ・尾崎啓子・吉川はる奈（2009）『私立幼稚園における「気になる子ども」の保育の困難さに関する調査研究－自由記述の分析を中心とて』埼玉大学紀要 教育学部 58(2), 197-204.
- ・酒井香奈・野崎とも子（2014）『発達障害を持つ子どもの言動から教師が受ける感情と教師への支援について』千葉大学教育学部研究紀要 62, 67-73.
- ・榊原洋一（2012）『エビデンスに基づく乳幼児保育・発達障害トピックス』診断と治療社.

- ・ 櫻井慶一（2015）『保育所での「気になる子」の現状と「子ども・子育て支援新制度」の課題：近年における障害児政策の動向と関連して』生活科学研究 (37), 文教大学, 53-65.
- ・ 下野未紗子・稲富眞彦（2007）『保育所における「気になる」子ども：行動特徴，保育者の対応，親子関係について』高知大学教育学部研究報告 (67), 11-20.
- ・ 庄司順一・尾木まり・齊藤多江子・須永美紀・水枝谷奈央・桃澤早苗（2011）『保育の質の評価に関する研究』保育科学研究 1, 1-21.
- ・ 高濱裕子（2000）『保育者の熟達化プロセス：経験年数と事例に対する対応』発達心理学研究 11(3), 200-211.
- ・ 田中康雄（2008）『軽度発達障害－繋がりあって生きる－』金剛出版.
- ・ 吉兼伸子・林隆（2010）『特別支援教育時代における保育者の業務上の保育困難感について』山口県立大学学術情報, 3, 81-87.

本研究は、長野県立大学平成 30 年度第 1 回学長裁量経費の助成を受けて実施されたものである。